

『すずめくんどどこでごはんたべるの?』  
たしろちさと 文・絵  
マルシャークの詩より 福音館



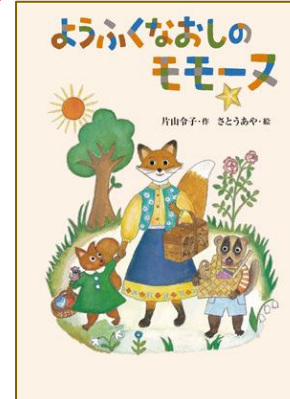
「ぼくはね、どうぶつえんのどうぶつたちのところではたべるんだよ」 かばのところでおいもを食べて、きつねやらいおん、きりんのところではいろいろ食べる…でも、わにのところでは…ちょっとどっきり。この絵本を読むと動物園にでかけてすずめをさがしてみたくになりますよ。文は短く少ないけれど、絵はあざやかな色使いで、幼い子どもじっくり見て楽しめる絵本です。

# こひつじ文庫だより

60号

**みなさん、おげんきですか？  
本を楽しむのによい季節になりましたね。  
こひつじ文庫から、おすすめの本をえらんでみました。  
みなさんは、どんな本が好きですか？**

『ようふくなおしのモモーヌ』  
片山令子 文 さとうあや 絵  
のら書店



シナモン村には、ようふくなおしのきつねのモモーヌのおみせがあります。モモーヌはしあわせです。この村の人たちは、ようふくをたせつに着ているからです。♪たいせつなふくをなおします。ふくをたいせつにすると、こんどはふくがあなたをやさしくつつんでくれますよ♪モモーヌと村の人たちの毎日を、まずはとてもかわいい絵で楽しんでください。きっと、モモーヌのお店に行きたくなってしまいますよ。

## 『せかいいちうつくしいぼくの村』

小林 豊 作・絵 ポプラ社



アフガニスタンは戦争のため、今は荒れはててしまいました。40年前は、花が咲きくだものがたわわにみどり、人々は明るくかぶよく生きていました。パグマン村のヤモ少年は、家をとれたすももとさくらんぼを、とうさんと市場に売りに行きました。そんな平和な日々が早くもどりますように祈らずにはおられません。中村哲医師が「医療より水を」と水路をひいた国のおはなしです。

## 『かぎのない箱』

J・C・ボウマン、M・ビアンコ 文  
瀬田貞二 訳 寺島竜一 絵  
岩波書店

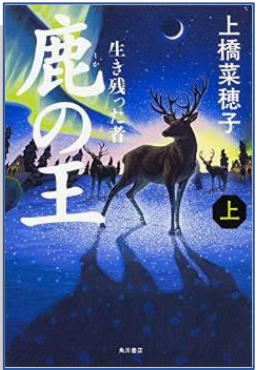


今はもう大きくなった孫たちが、わが家に合宿に来て床に就くとき、よく絵本や物語を読み聞かせていました。この「かぎのない箱」は、何度も彼らがリクエストしたフィンランドの7つの昔話です。まだ見たこともない、フィンランドの美しい湖や深い森を心に想い描きながら、その地で勇敢に魔法使いとスリルに満ちた知恵比べをする若者になった気分です、そして最後に味わう幸せな世界をきっと忘れないでしょう。ちりばめられた挿絵もなかなか個性的です。

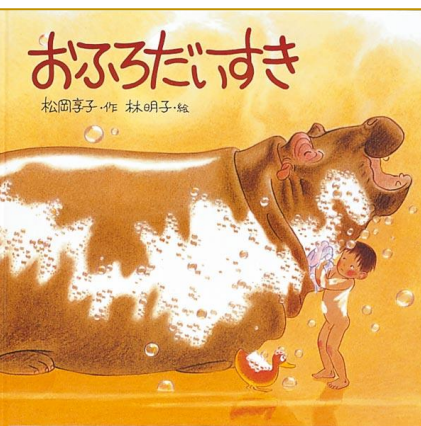
敗戦奴隷となったヴァンは、岩塩鉱で働かされていた。そこを山犬の群れ

## 『鹿の王』上・下

上橋菜穂子 作 角川書店



が襲い、かまれた者は病になり死んでいく。生き残ったヴァンは隠されていた幼子連れ逃れていった。壮大なファンタジーの始まりである。しかしこの物語は一筋縄ではいかない。もうひとりの主人公で病の治療にすべてをかける医師のホッサル。彼らの行く手を阻む大国の思惑と、それに翻弄される小国の民など。ウィルスの本を読んだことが、この本を書くきっかけになったと作者が言う。今こそ読むべき物語。



『おふろだいすき』松岡享子 文  
林 明子 絵  
福音館

小さな男の子がひとりでお風呂にはいり、湯船の中から次々に現われる動物たちと遊ぶ、想像力豊かな楽しい絵本です。でてくる動物が石鹸ですべて競争したり、シャボン玉をだしてくれたり。また動物がおおきくなるにつれて、お風呂場も大きくなっていき、いつのまにか大きな海につながっていたり。ちょっと長い絵本ですが子どもに読んであげると夢中になって聞いています。最後に湯上りタオルを持ってお風呂場の外でまっているお母さんにほっとする、林明子さんの暖かな絵もすばらしいおススメの一冊です。

『さよなら、田中さん』  
鈴木るりか 作  
小学館



作者は、現在高校2年生、この本は中学2年生の時に、今までの原稿をまとめて出版したものだそうです。モデルは片親のいない友人で、その生活を傍からみていて苦勞を感じとったのがきっかけで、同年代の子どもにも、また大人にも共感を与える作品です。作者は創作について「どんな物語でも最後は光の方にむかっていくのがいいと思います。暗い話も嫌いではないが、希望につなげていきたいです」と語っています。

## こひつじ文庫は

毎週土曜日 午後2時から4時まで開館しています。

ひとり5冊まで1か月貸出しています。

2020年は「こひつじ文庫のクリスマス」は行いませんが、

11月28日から12月28日に文庫に来てくださった方には、

クリスマスプレゼントを用意しています。

ぜひ、文庫の本たちに会いにきてくださいね。



## 『グレタ・トゥーンベリ』

ヴィヴィアナ・マツァ 著  
赤塚きょう子 訳 金の星社

今年の夏の耐え難い暑さ、猛烈な台風、カリフォルニアの数えきれないような山火事、気候変動の深刻さが現実のものとなってきました。依然として猛威をふるっている新型コロナウイルスも、人間があまりにも自然を破壊し野生動物のすみかを奪った結果かもしれません。今の子どもたちが大きくなる頃には、世界はどうなっているでしょう。こうした危機感を持ったスウェーデンの16歳の環境活動家、グレタ・トゥーンベリさんのお話です。この本はやさしく書かれており、小学校高学年なら理解できるでしょう。この本を読んで、環境問題を皆で考えたいものです。

こひつじ文庫のホームページはこちらから

<http://www.shinkou-kyoukai.org/>